

参加型デザインによる最適な教室環境の探究 -多様な生徒教員の協働性と心理的安全性を保障する グローバルセンターの構築-

佼成学園女子高等学校

秋田 聡大

他 1 名

はじめに. 研究目的と意義

本研究は、生徒が学ぶ教室空間の在り方を生徒と教員が対話しながら探究して構築する「参加型デザイン」のプロセスの有効性を検証することを主目的とする。

筆者の勤務校である佼成学園女子高等学校には「グローバルセンター」という特別教室が設けられている。主にスーパーグローバルコースと留学コースの生徒達が、英語や課題研究に取り組む教室空間である。そこには両コースの指導や海外プログラム運営を担う国際部の職員スペースが併設されている。しかし、現在のグローバルセンターの課題として、学校に属する生徒教員の一部しか利用していないことや、アクティブラーニングの学習空間として使い勝手が十分でないことなどが挙げられる。そこで、「参加型デザイン」の方法論を採用し、多様な生徒と教員とデザイナーが参加する形で本校のグローバルセンターのリノベーションプロジェクトを探究的に展開することにより、生徒と教員にとって理想の空間像を明らかにすることとする。

生徒の発達や教員の勤労において、物理的な環境がもつ影響は大きい。多くの生徒や教員を包含し、個々の生徒の自由な創造性を育み、教員がいきいきと教育活動に集中できる環境を用意することは、学校が果たすべき重要な責務である。こうした責務を果たすためには、教員が全てを決めるのではなく、学びの当事者である生徒が参加する形で、教員と対話を進めながら意思決定をしてプロセスが重要であると考え。本研究によって、新たな学びの場を構築する「参加型デザイン」の方途や効果が明らかになれば、今後、生徒の主体性を尊重しながら今日の教育観に合う新たな学びの空間を設けたいと考える多くの私学にとって参考になり、教育界全体の発展に寄与することができるだろう。この点が本研究の意義である。

本論文は 5 つの章により構成される。〈1.研究背景〉では、今日の教育観、望ましい学校施設のありかた、参加型デザインの定義や特徴、以上三点を公的資料や先行研究をもとに概観する。〈2.先行調査〉では、展示会での講演会聴講、ニュージーランドの教室環境の調査、千葉県内の先進事例の調査結果を報告する。〈3.グローバルセンターの課題と理想のありかた〉では、グローバルセンターの現状、生徒や教員へのアンケート調査、生徒や教員のフォーカスグループミーティングでの議論などを通じて明らかになった課題と理想像

を報告する。〈4.グローバルセンターのリノベーション〉では、空間デザインとリノベーションを実際に行う業者である良品計画の提案内容、その打合せ記録やワークショップでの議論を報告し、参加型デザインの実践プロセスを明らかにする。〈5.考察と今後の展望〉にて本研究全体を考察して今後の展望を述べる。

なお、本報告書においては、読者に空間のイメージを持って頂くために多数の写真画像を添付した。これらは全て筆者および共同研究者撮影のものである。枚数多数のため、画像の見出しとナンバリングの記載は省略した。

1. 研究背景

1.1. 令和の日本型学校教育の教育観

2020年に始まった新型コロナウイルス流行を機に、教育現場では、教員と生徒、あるいは生徒と生徒が対面で学び合い教え合う価値を改めて認識させられた。従前より進んでいる主体的、対話的で深い学びへの転換と併せて、教育観の更新が常に求められている。本項では、2021年1月の中央教育審議会による答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」をもとに、本研究に関わる今日の教育観を概観する。

本答申では、Society5.0時代の到来という社会背景を踏まえ、以下の必要性を冒頭に掲げている。

○ このように急激に変化する時代の中で、我が国の学校教育には、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。(p.3)

多様な「個」を尊重したうえで「協働」できる人間像が示されている点に留意すべきであろう。答申ではさらに、日本型学校教育の成り立ちと成果、直面する課題と新たな動きについて列挙したのち、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿をまとめている。そこでは「個に応じた指導」あるいは「個別最適な学び」の充実が求められている。注目すべきは、個に応じた指導が「指導の個別化」と「学習の個性化」の2つに分けて整理されている点である。

○ 全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

○ 基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力

等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

○ 以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。(p.17-18)

冒頭に掲げられた多様な個の尊重という理念が、教師視点と学習者視点の両面から実現されるべきものであることが理解できる。画一的な一方通行型の一斉授業からの転換を意味していると言えよう。併せて、「協働」という点では以下のように提示している。

○ さらに、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。(p.18)

協働的な学びと個別最適な学びは両立できるものであり、むしろ個別最適な学びが孤立した学びに陥らないようにすべきという指摘は重要であろう。多様な個を尊重した協働的な学びの実現が求められており、その実践として、「教師と子供の関わり合いや子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動、専門家との交流など、様々な場面でリアルな体験」に加え、「同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや他の学校の子供との学び合い」「子供一人一人が自分のペースを大事にしながら共同で作成・編集等を行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動」「遠隔地の専門家とつないだ授業や他の学校・地域や海外との交流」が挙げられている(p.18-19)。

令和の日本型学校教育における教職員の姿としては以下のように述べている。

○ 教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。その際、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。(p.22) 教員自身が探究し続け、子供の学びを引き出して支援する役割を強調している。こうした役割を果たすために、教員の過剰な労働負荷を軽減するなどの働き方改革が必要であることは、今日の教育界においておおかた異論のないところだろう。

さらに本答申が「令和の日本型学校教育」の構築に向けた今後の方向性として第一に掲げ

ているのが、「学校教育の質と多様性，包摂性を高め，教育の機会均等を実現する」ことであり、その要点の一つとして下記を挙げている。

○ 学校に十分な人的配置を実現し，1人1台端末や先端技術を活用しつつ，生徒指導上の課題の増加，外国人児童生徒数の増加，通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒，子供の貧困の問題等により多様化する子供たちに対応して個別最適な学びを実現しながら，学校の多様性と包摂性を高めることが必要である。その際，現状の学校教育における個の確立と異質な他者との対話を促すことに弱さがあるとの指摘も踏まえ，一人一人の内的なニーズや自発性に応じた多様化を軸にした学校文化となり，子供たちの個性が生きるよう，個別化と協働化を適切に組み合わせた学習を実施していくべきである。（p.24）

生徒達が単に学力面だけではなく、様々な外的要因により多様化しており、そうした多様な生徒達をいかに包摂するかが今日の学校教育の課題であることが示されている。日本語を母語としない生徒や発達障害を抱える生徒は、私学においても今後ますます増えていくだろう。多様な生徒達の個性が生きるような教育が求められているのである。

ここまで、本答申の総論から要点を一部抜粋し、今日の教育観を概観した。答申では各論において、「新時代の学びを支える環境整備について」述べており、その基本的な考え方を以下のように示している。

○ Society5.0 時代の到来など子供たちを取り巻く環境が大きく変化する中で，全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと，協働的な学びを実現し，教育の質の向上を図る必要がある。また，今般の新型コロナウイルス感染症対応を踏まえれば，新たな感染症や災害の発生等の緊急時にあっても全ての子供たちの学びを保障する環境を整備することが喫緊の課題である。（p.81）

上記の考え方を踏まえて、「新時代の学びを支える教室環境等の整備」について論じられている。

○ 情報端末・教科書・ノート等の教材・教具を常時活用できる教室用机（新 JIS 規格），情報端末の充電保管庫等の整備や遠隔会議システム，統合型校務支援システムの導入など，「1人1台端末」や遠隔・オンライン教育に適合した教室環境や教師のための ICT 環境の整備を図る必要がある。また，学校図書館における図書の充実を含む環境整備など既存の学校資源の活用も併せて進める必要がある。さらに，特別教室等への空調設備の設置促進など「新しい生活様式」も踏まえ健やかに学習できる衛生環境の整備を行う必要がある。また，障害のある子供の学びの環境の整備も極めて重要であり，障害者差別解消法や今般改正されたバリアフリー法，教育の ICT 化の動向も踏まえつつ，バリアフリー化を進める必要がある。（p.81）

ここでの記述は総花的であり、具体的な教室環境の空間像や整備の道筋が見えない。そこで、次項で別の公的な報告書を参照してこの点を掘り下げたい。

1.2. 新しい時代の学校施設のありかた

文部科学省は、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実等に向け、新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方及び推進方策について議論する有識者会議「学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議 新しい時代の学校施設検討部会」を設け、2022年3月に最終報告書「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」を公表した。本項では、この報告書の議論を紹介したい。

報告書では、新しい時代の学びを実現する学校施設のキーコンセプトを「Schools for the Future 『未来思考』で実空間の価値を捉え直し、学校施設全体を学びの場として創造する」と定め、その意味するところを以下3点挙げている。

○ ICTの活用などにより、学びのスタイルが多様に変容し、校内のあらゆる空間が子供たちの学びの場となる可能性を秘めている。学校施設は、教科等のみならず、給食や清掃等の課外活動など、全人的な教育を提供する場、子供たちの愛着・誇り・感謝の気持ちを育む場ともなり、それは教室に閉じるものではない。

○ 子供たちがともに集い、学び、遊び、生活する実空間として、また、他者と協働し、直面する未知の課題に対して学び合い、応え合う共創空間として、どのような学びを実現したいか、どのような空間を創り、それをどう生かすか、関係者が新しい時代の学び舎づくりのビジョン・目標を共有しつつ、「未来思考」をもって実空間を捉え直す必要がある。

○ 子供たちにとって「明日また行きたい学校」となるために、また、そこに集う人々にとっても「いきいきと輝く学校」となるために、学校施設全体を学びの場として捉え、魅力あるものにしていく必要がある。(p.13)

上記を補足する形で、「未来志向」の視点が意味するところを以下四点挙げている。

① 学校は、教室と廊下それ以外の諸室で構成されているものという固定観念から脱し、「学校施設全体を学びの場」として捉え直す。廊下も、階段も、体育館も、校庭も、あらゆる空間が学びの場であり、教育の場、表現する場、心を育む場になる。

② 教室環境について、単一的な機能・特定の教科等に捉われず、横断的な学び、多目的な活動に柔軟に対応していく視点(柔軟性)をもつ。

③ 紙と黒板中心の学びから、1人1台端末を文房具として活用し多様な学びが展開されていくように、学校施設も、画一的・固定的な姿から脱し、時代の変化、社会的な課題に対応していく視点(可変性)をもつ。

④ どのような学びを実現したいか、そのためにどのような空間を創り、それをどう生かすか、関係者が、新しい時代の学び舎づくりのビジョン・目標を共有する。

教室だけでなくあらゆる空間が学びの場であることは、現代の学校において重要な視点である。固定化された学級単位の教室空間では包摂しきれない多様な生徒や多様な学びを、学校の様々な空間で包みこむことが求められている。そうした空間を実現するうえで鍵と

なる概念として、柔軟性と可変性を挙げている点も的を射ているといえよう。新しい学びの空間において、「一つに捉われない」という視点は常に持ち続けていきたいものである。

また、上記④で「関係者が、新しい時代の学び舎づくりのビジョン・目標を共有する」とあるが、ここでの「関係者」が大人だけでなく生徒達を含むと考えたい。学びの当事者である生徒、その支え手である教職員、さらにはこうした空間の構築に関わる専門家や地域コミュニティの人々もビジョンを共有できるようにするのが理想と言えるだろう。

こうした理念を踏まえて、報告書ではいくつかの学びの空間を提案している。

図1は、多目的スペースの活用による多様な学習活動への柔軟な対応を図示化したものである。紙と黒板中心の学びから、一人1台端末を活用して多様な学びが展開されていく姿が描かれている。

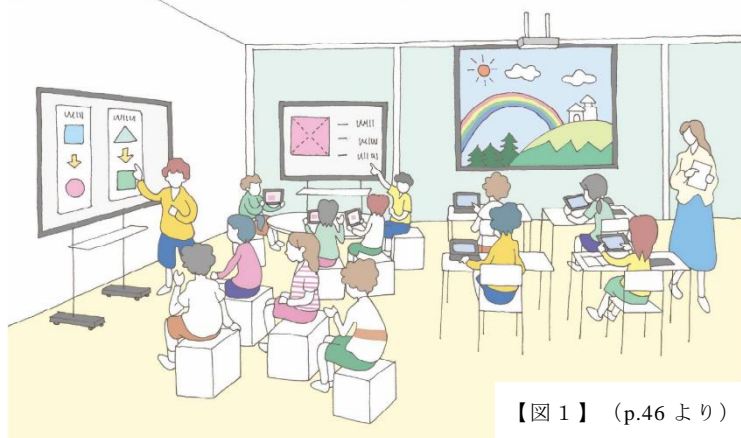
図2も同様に多目的スペースの活用例である。単一的な機能や特定の教科に捉われず、横断的な学びに対応できるような創造的な空間の姿が描かれている。

図1と図2に共通する点として、同時並行で二つの授業が展開されている点にも注目したい。一つの空間は一つの授業という固定観念に捉われず、異なる教育活動を小規模に並行して展開することで、多様な学びを実現している。

図3は、設備や家具の工夫による多様な学習活動の展開・教室環境の充実の例である。移動が容易な椅子、プロジェクターや大型提示装置などを活用することで、正面性のない空間となり、多角的な学習や活動の展開が可能となるさま

01 【学び】柔軟で創造的な学習空間を実現する

多様な学習活動を展開できる学習空間



【図1】 (p.46より)

04 【学び】柔軟で創造的な学習空間を実現する

様々な教科等の教室の有機的な連携・分担による多様な活動の展開



【図2】 (p.48より)

09 【学び】柔軟で創造的な学習空間を実現する

設備や家具の工夫による多様な学習活動の展開・教室環境の充実



【図3】 (p.50より)

が描かれている。

図4は、読書・学習・情報のセンターとなる学校図書館を核とした「ラーニング・コモンズ」の例である。報告書では「各教科等における調べ学習での活用や、子供たちの自主的・自発的な学習、協働的な学習を促すことが可能となる」(p.20)と述べている。一方、野中(2023)は、こうしたラーニング・コモンズの活用が「学級単位での活用という制約の範囲内での活用に留まってしまう」(野中・豊田、2023、p.15)ことになりがちであることを課題として挙げている。生徒達が自由かつ自主的に空間を利用する働きかけが大事になるだろう。



【図4】(p.49より)

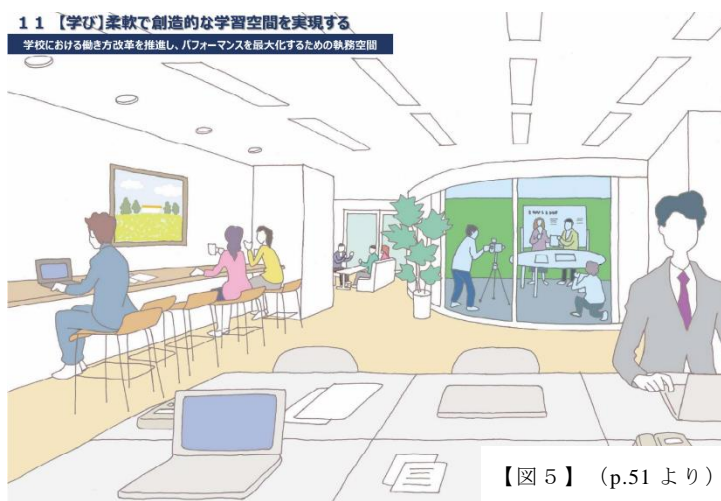
報告書は、学びの空間だけでなく、教職員の働く空間としての学校施設についても下記の通り言及している。

○ 学校施設は児童生徒の学習・生活の場であるとともに、教職員が働く場でもある。そのため、授業を行う教室はもとより、職員室や準備室等においても、教職員がより効果的・効率的に授業の準備や研修、様々な校務等を行うことができるよう、執務環境としてふさわしい基本的な機能を確保する必要がある。

○ また、学年や教科等を超えた横断的な観点で学校全体を運営していくことや、支援スタッフの参画等、多様な人材による「チーム学校」として学校運営を進めていくことが求められていることから、多くの関係者と連携・交流ができる環境とすることが重要である。

○ 職員室は、教職員が円滑に執務、作業、打合せ等を行うことができるよう、十分なスペースを確保するとともに、統合型校務支援システム等を含め、常時ICTが活用できる環境を整備することが重要である。

○ また、遠隔・オンライン教育のための映像コンテンツ制作も含めた教材の研究・準備やオンライン会議・研修を行うスタジオなどの空間を整備することが重要である。



【図5】(p.51より)

○「チーム学校」としてパフォーマンスを最大化することができる機能性や居住性等をもった執務空間としていくため、日常的なコミュニケーションを誘発し、リフレッシュできるラウンジなどのスペースを整備することも重要である。(p.21)

図5は上記の特徴を実現する教職員スペースの例である。円滑な執務、打合せ、協働作業ができるだけでなく、気楽に情報交換や休息ができる空間が示されている。

最後に、新たな学習空間の整備方法の分類パターンを表1で示す。

分類	整備方法イメージ	具体的な整備内容例
A	既存の面積資源を有効活用・再配分するとともに不足するスペースを増築等により補い、多様な学習活動等に柔軟に対応できる空間を整備(可動間仕切り、多目的スペース、廊下等共用部分、図書館、職員室等) 【増築を組み合わせたり、構造に手を加えたりするパターン】	既存のプランそのものを見直し、増築を組み合わせたり、必要に応じ、構造に手を加え壁等の位置変更を行ったりして、創造的な空間を整備。ゆとりのある教室の整備、教室と廊下の仕切りを可動間仕切りにした上で、廊下の床の木質化、温熱環境の改善等により、共用部分を有効活用。コンピューター教室と図書館を組み合わせ、学校の中心にメディアセンターを新たに整備。あわせて、円滑な執務、協働作業、休息等のための空間を充実。
B	既存の面積資源を有効活用・再配分し、多様な学習活動等に柔軟に対応できる空間を整備(可動間仕切り、多目的スペース、廊下等共用部分、職員室等) 【構造には手を加えず、既存施設を生かして空間を再構成するパターン】	既存のプランそのものを見直し、多目的な学習ができる空間(教室一つ分)を学年ごとに整備、教室と廊下の仕切りを可動式とすることで開放的な空間を整備、廊下の床の木質化、温熱環境の改善等により、共用部分を有効活用。
C	既存の面積資源を有効活用し、多様な学習活動等に対応 【既存施設をそのまま生かすパターン】	余裕教室を新しい学びに対応する創造的空間として整備、ロッカースペース等の配置の工夫等による教室空間の有効活用。

【表1】(p.62より)

新たな学習空間の構築は、必ずしも新築や増築を伴うものではないことがわかる。本研究が推進する本校のプロジェクトは、上記分類のBに相当すると考える。

1.3. 参加型デザインとは

本研究では、単に新たな教育環境を構築してその姿を示すのではなく、構築のプロセスとしての「参加型デザイン」の有効性を検証していく。本項では、複数の先行研究を参照しながら参加型デザインの定義や特徴を明らかにする。

参加型デザイン(Participatory Design)とは、「デザインプロセスに非専門家であるユーザをはじめとした多様な利害関係者を巻き込むデザイン手法」(水野、2019、p.1)である。その目的は、歴史的・地域的な経緯により2つあると山内(2012)は述べている。

参加型デザインには、二つの大きな目的がある。一つは、民主主義を理想とし、デザインによって影響を受ける利用者の声をデザインに反映させるという、政治的な目的である。この目的を旗印として、とくに北欧を中心に参加型デザインが発展していっ

た。労働組合などが主導権を取り、あるいは協力し、参加型デザインを推し進めていった。もう一つは、現場を一番よく知っている利用者をデザインに参画させることにより、より現実的な解をデザインすることである。（中略）知らない設計者が知らないまま設計するのではなく、知っている利用者を巻き込むことでその知識を利用する。これは政治的な目的よりも、よい技術をデザインするという効果に注目したアプローチである。北米における参加型デザインは、この後者の目的を重視してきた。（山内、2012、p.1）

本研究における参加型デザインの主たる目的は後者のほうに該当するが、前者すなわち参加型デザインは民主主義を実現するという目的とも無縁ではない。学びの当事者である生徒達の権利を保障する空間をデザインするという考え方は、本研究が目指すありようと一致する。

参加型デザインにおいては、「つくりながら考える」という視点が重要である。平井（2014）は、英国のロイヤルカレッジ・オブ・アート（RCA）で学んだデザインプロセスと日本のデザインプロセスの相違点として「日本の場合は“考えてからつくる”のに対し、RCAでは“つくりながら考える”」（カセム他、2014、p.40）という点を挙げている。その狙いとして「課題発見にはユーザーの参加が必要であり、彼らは被験者ではないこと、そしてどうすればユーザーがストレスなく、さらには楽しく参加できるかを真剣に考えた末のやり方であることがわかった」（前著、p.40-41）と述べている。課題はあらかじめ全て明らかではなく、デザインプロセスを通じてユーザーとともに発見するという点である。塩瀬（2014）も、「ユーザーが予め何か具体的なニーズを持ち込んでくるというよりはむしろ、技術者やデザイナーとの対話を通じて、潜在していたニーズが顕在化する」（前著、p.61）と述べている。参加型デザインの過程においては、特に対話を通じてニーズが徐々に言語化していくという点を意識することが重要であることがわかる。

2. 先行調査

2.1. 展示会での講演会聴講

2024年6月7日（金）、東京ビッグサイト TFT ビル西館 2階 TFT ホールにて開催された教育関係者向けセミナー&展示会のイベント「NEW EDUCATION EXPO (NEE) 2024」に出張し、下記セミナーにて講演を聴講した。

1) 長澤悟「新しい学びを創造する学習空間と教職員スペースの創出のアイデア」

長澤先生は建築学者。専門分野は建築計画（教育施設、地域施設、住宅等）と設計。東洋大学名誉教授で教育環境研究所所長を務めている。講演において得られた気づきは下記の通り。

- ・学校のリノベーションにあたっては、設計士に設計を委託する前に、学校としてどのような空間を望むか、言語化しておくことが大事。大きな切り口として、コモン・ウェ

ルビーイング・レトロフィットの三つがあり、それぞれさらに細分化できる。

・職員室についても、教員のウェルビーイングを実現する環境として「教職員コモンズ」を志向する学校が出始めている。

2) 柳澤要「海外にみる先進的な学校施設 ～アメリカ・シアトルのケーススタディ～」

柳澤先生は千葉大学大学院工学研究院教授。専門分野は建築デザイン、建築計画、環境行動デザイン。講演では、米国シアトルの学校7つを紹介。環境への配慮など、どこも参考になるが、特に2017年に竣工した **Madrona School** は、その生徒の設計プロセスへの参加などにおいて有効な事例といえる。その建築的特徴について、講演で配付されたスライド資料より以下抜粋する。

・児童生徒が主体的に設計プロセスに関わることで、すべての生徒が継続的に成長できるような学校、生徒・スタッフ・保護者間の関係を育む学校空間を目指した。

・マドローナの新校舎は、すべての人のためにデザインするプロセスを経て、すべての生徒が受け入れられ、つながっていると感じられる。より、音響的、物理的、そしてジェンダーを包含したコミュニティを実現している。

・各ラーニングセンターは、1つの大きな教室としても、2つの独立した、しかし視覚的にはつながったスペースとしても機能するよう、柔軟性を重視して計画されている。ラーニングセンターは、2人の教師、54人の生徒、複数のパラ・エデュケーターが同じ学習環境に集まれるように構成されている。

・ラーニングセンターは、異年齢の児童生徒が互いに交流できるよう、敷地内に分散して設置されている。マドローナの生徒達は、自分たちを「学習の共同体」と呼び、共に学ぶという考えを強化する方法として、透明性・つながりを大切にしている。

3) 下倉玲子「生きた教室空間の徹底解剖 オーストラリアの SJ 小学校を事例に」

下倉先生は呉工業高等専門学校准教授。専門分野は社会基盤 / 建築計画、都市計画 / 教育施設、特別支援教育環境、学校と地域。教室の家具配置と教育効果に関する面白い研究を展開している。以下、講演で得られた具体的な気づきを列挙する。

・教室の角は落ち着く空間。なるべく家具を置かないようにすべき。教室の扉も角に接していない方が良い。

・机が床面積に占める割合は少ないほうが良い。オーストラリアは10%程度、日本は17%程度。

・動く三大要素

人 集合（強集合と柔集合）と分散のバランスをとる。

家具 教室内を生徒が回遊できるようにテーブルを配置すると良い。

物 必要な物を必要な時だけ使えるように配置保管。

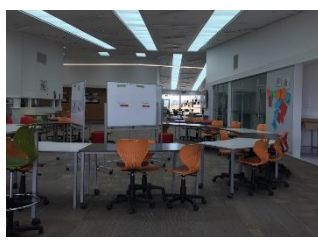
・照明は常につけるのではなく、効果を考えて使う。

例) 窓側は消し、廊下側はつける。朝の落ち着かせたい時は全て消したままにする。

2.2. ニュージーランドの学校視察

2024年7月1日から7月5日にかけて、ニュージーランド出張中に現地の高校10校を訪問した。主目的は本校留学コースの生徒受け入れに関わる現地校担当者と意見交換するためであったが、同時に、ニュージーランドの教育および教育環境について学ぶことも目的とした出張であった。以下、得られた気づきである。

- ・オープンスペースの教室環境を設けている学校が多い。机や椅子の配置も流動性が高く、自学や協働学習が容易に実践できる学習環境となっている。一方で、一人で集中して学べるブースや、従来型の閉じられた教室もあった。多様な学び方に対応した教室空間を整備していることが分かる。



- ・実技科目の設備が充実している学校が目立った。工作、音楽、調理、科学、演劇、情報、美術、被服など。それぞれ十分に広い空間のなかに必要な機材が置かれていて、使い勝手が良い印象。



- ・教職員のためのスペースがとても充実している。教室のそばに4-5名程度が仕事できる部屋や、先生方が飲食しながらソファでリラックスして会話できる部屋などがある。これらの教職員用スペースの多くは、生徒が入れないルールとなっている。



授業風景も見学させて頂いたが、一斉講義型の授業は少なく、グループワークや個人作業をしている場面が大半であり、教員は個別に生徒をサポートしている様子が多く見られた。こうした授業形態と教育環境がよく適合していることが見てとれた。

2.3. 千葉県内の先進事例の施設視察

2024年11月12日（火）、①都市交流施設保田小学校、②鴨川市総合交流ターミナル里のMUJI みんなみの里、③MUJIBASE OIKAWA（旧老川小学校）を訪問視察した。いずれも地域コミュニティの拠点となる施設であり、①③は廃校を利用して作られた。

① 都市交流施設 保田小学校

2014年に廃校となった千葉県安房郡鋸南町の保田小学校をリノベーションして2015年に作られた施設。地域の飲食店やマルシェに加え、コワーキングスペースや子ども達用のプレイスペースを設け、



地域の様々な年代の人が集う場所となっている。本棚・テーブル・椅子が置かれた広い通路は光が広く差し込み、憩いの場所となっている。

② 鴨川市総合交流ターミナル里の MUJI みんなみの里

2017年4月に良品計画と千葉県鴨川市が締結した「地域活性化に関する協定」をもとに、2018年より地域と連携しながら運営されている総合交流ターミナル。四季折々の自然や動物と触れあえる里山デ



ッキや農地公園が併設されている。施設内は無印良品の飲食や物販コーナーに加えて、書籍のコーナーが充実していて、本を手にとってリラックスできる空間になっている。

③ MUJIBASE OIKAWA（旧老川小学校）

2013年に廃校となった千葉県大多喜町の老川小学校をリノベーションして2024年に作られた施設。金澤篤店長に宿泊施設、コワーキングスペース、地域のNPOが入居するコミュニティスペースなど施設全体を案内して頂いた。体育館の2階は読書ができるギャラリーになっており、ミカン箱などをアップサイクルした本棚が置かれている。宿泊棟の部屋には



畳の小上がりがあり、洗練されながらも心落ち着く空間となっている。

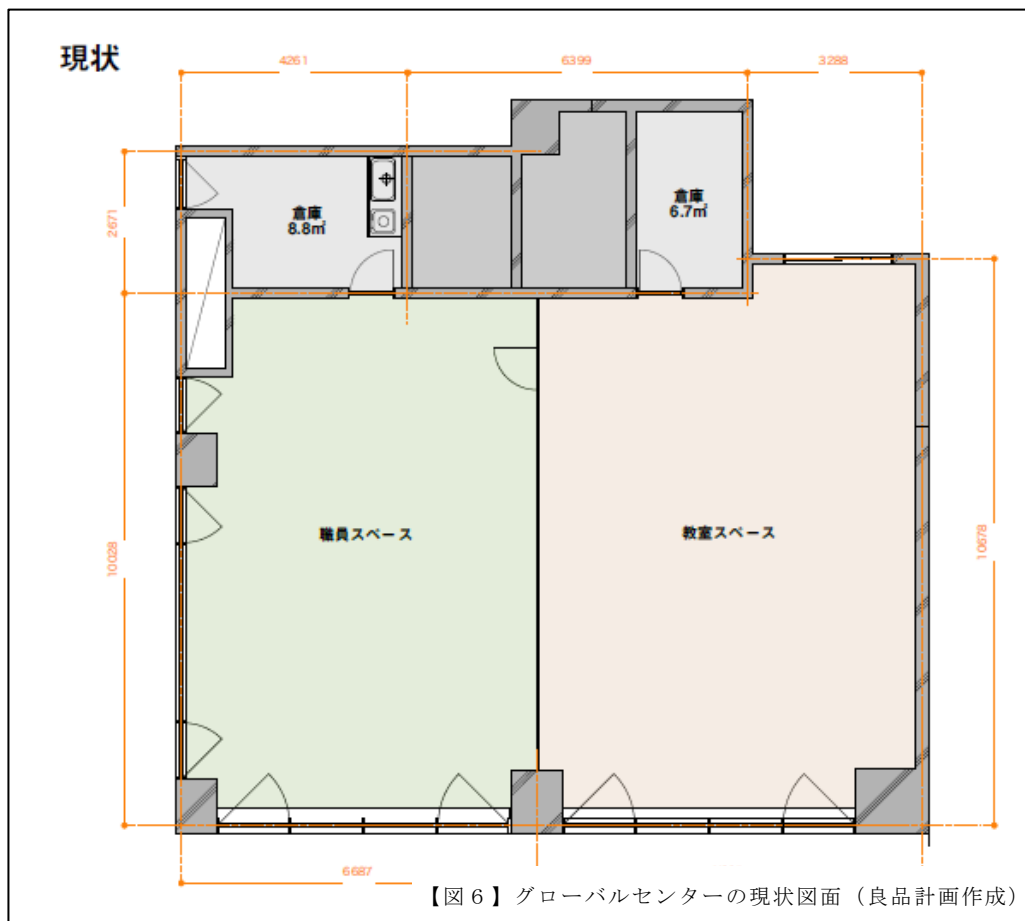
上記①②③の施設に共通する特徴として、地域に根ざしていること、多様な利用者を想定していること、ゆったりと落ち着く空間になっていることが挙げられる。

さらなる共通点として、木質化されている点も見逃せない。木材は、断熱性や調湿性に優れるだけでなく、良質の温かみや味わいがある。快適で健やかな環境を生み出すことで、そこで学んだり働いたりする人々の健康面や学習面での効果も期待されるだろう。この点もプロジェクトに反映させていきたいと感じさせられた。

3. グローバルセンターの課題と理想のありかた

3.1. グローバルセンターとは

校成学園女子中学高等学校グローバルセンターは、管理棟 2 階にある特別教室兼国際部教員室である。管理棟とは主要校舎 4 棟のうちの 1 つであり、敷地の西側中央に



位置する 3 階建ての建物である。北側の高校棟、南側の中学棟 2 棟をつなぐ役割も果たしている。一般教室や職員室はそれぞれ高校棟や中学棟にあり、管理棟には校長室、事務室、大会議室、教務部室、進路指導部室、生徒指導部室、広報室、保健室、コンピューター室、カフェテリアなどがある。グローバルセンターは 2 階に位置する 129.7 m²の空間だが、間に建て付けの壁があり、南側 68.9 m²が教室スペース、北側 60.8 m²が国際部職員スペースとなっている。

教室スペース

主に高校スーパーグローバルコース（各学年約 10-15%の生徒が在籍）と留学コース（各学年約 8-10%の生徒が在籍）の生徒と担当教員が、英語や探究系の授業で使用している。今年度は、週 18 コマの授業がここで実施されており、そのうち 17 コマは SG コースの授業で



ある。キャスター無しの大きな島形楕円テーブルが3台あり、それぞれ8脚程度の椅子が置かれている。電子上映ができるモニター、電子黒板、キャスター無しのホワイトボード数台、金属製本棚などが置かれている。西側は一面ガラス窓だが、老朽化により窓を開けることができない。南側は一面白壁で、かつては教職員や生徒が作った掲示物や写真が所狭しと掲示されていた。東側には6.7㎡の小部屋があり、使用頻度の低い資料や物品を保管する倉庫となっている。

職員スペース

国際部所属の教員(専任教諭11名所属)の執務場所となっている。個人デスク11台があり、5台ずつで島を形成し、1台は国際部長席となっている。打合せ用テーブル1台と椅子6脚、金属製本棚等が数台ある。東側には8.8㎡の小部屋があり、流しや冷蔵庫に加えて、ファイルを保管する書棚が置かれている。西側と北側は窓ガラスがあるが、やはり開けることができない。



3.2. 生徒対象アンケート調査

3.2.1. アンケート概要

対象：校成学園女子中学高等学校の中学生・高校生（母数779、有効回答数48）

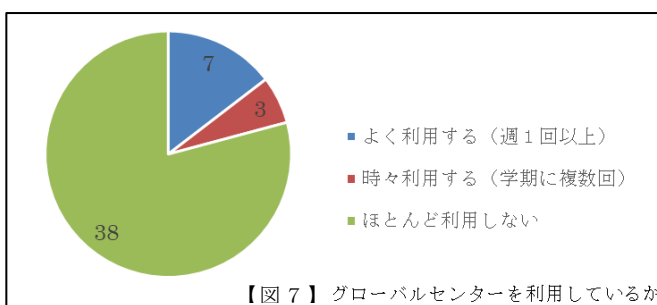
日時：2024年6月16日～7月16日

方法：学内プラットフォーム Classi を利用したオンライン配信調査

質問数：選択式1、記述式7の計8項目。

3.2.2. 調査結果

・グローバルセンターの利用状況を調査したところ、図7のとおり、79%に相当する38名がほとんど利用しないと回答した。よく利用する生徒は15%に相当する7名。本アンケートに回答しなかった多数の生徒の利用状況も割合としては変わらない。せっきくの空間を約8割の生徒が利用していないということは、最も大きな課題であると言えよう。



【図7】グローバルセンターを利用しているか

・「今のグローバルセンターの問題点はどんな点にあるか」という質問に対しては、「一部の生徒しか使わない」「自ら利用している人が少ない」「初めて入るひとは入りにくい」という回答が最も多く、6名が記載していた。利用状況の少なさを裏付ける回答と

言えよう。別の回答としては、「湿度が高く、空気が悪い」「ごちゃごちゃしていて勉強向きではない」「床の色を明るい色に変えるだけでも印象が変わる気がする」という意見もあった。

・「どのような教室や学習空間が必要か」という質問に対しては、「どんな学年も利用できる場所」「休み時間も年代関係なく話して仲良くする教室」などの回答が多かった。利用者が限られているという現状の課題を解決して欲しいというニーズが多いことを反映していると言えよう。

3.3. 教員対象アンケート調査

3.3.1. アンケート概要

対象：佼成学園女子中学高等学校の教職員（母数 64、有効回答数 11）

日時：2024年6月16日～7月16日

方法：学内プラットフォーム Classi を利用したオンライン配信調査

質問数：選択式 1、記述式 7 の計 8 項目。

3.3.2. 調査結果

・グローバルセンターの利用状況を調査したところ、有効回答数 11 のうち 58%に相当する 7 名がほとんど利用しないと回答した。アンケートに回答しなかった教員 53 名の多くも利用しておらず、生徒同様、教員も利用状況は低いと言える。

・「今のグローバルセンターの問題点はどんな点にあるか」という質問に対しては、「留学コースと SG コースの専用の教室で、利用する人が決まっている」「特別感・特権感がアピールされすぎ、留学・SG コース以外の生徒には敷居が高い」「明らかに、グローバル室は他の一般教室とは勝手が違い、ディスカッションを中心とした利用のための教室となっており、その存在意義は対外的にも高いと思うが、ここにしかそのような空間がないので、利用者は留学・SG コース生に限られてしまう点が仕方がないが惜しい点もある」など、利用生徒に限られるという内容の回答が 8 名から寄せられた。教員が感じている現在のグローバルセンターが抱える最大の課題は、やはりその排他性や閉鎖性にあると言えよう。

・「どのような教室や学習空間が必要か」という質問に対しては、「清潔で、快適、広々とした空間」「フランクに生徒同士や教員との会話が可能な空間」「開かれた異空間、対話の豊かな空間」など、グローバルセンターが抱える課題点を解決する必要性を感じさせる回答が多かった。

・「教員にとってどのような空間が必要か」という質問に対しては、「学年、部署、教科など関係なく自由に語り合える場所」「More pleasant, less cramped teachers' room and English department room, although I understand that this is not really possible given the space available.（もっと快適で、窮屈でない教員室と英語科準備室があれば良いが、スペース

的に不可能なのは理解している)」 「全教職員が同じ場所で過ごす機会が少なく、コミュニケーション不足になりがちだと感じます。職員室、教科、国際部と3つのデスクをいただいておりますが、それほど使わないので、フリーアドレスの空間を作っても良いのではないかと思います。それにより、教員の自由なディスカッションやコミュニケーションを促進できるのではないかと考えます。」などの回答が見られた。教員間のコミュニケーションを促進する空間に対する強いニーズが見て取れる。

3.4. 教員フォーカスグループミーティング

本プロジェクトへの参加を希望した有志の教員 11 名でフォーカスグループを結成し、Classi で情報共有グループを作成のうえ、計 3 回のミーティングを実施した。

3.4.1. 第 1 回ミーティング（課題の洗い出し）

7 月 20 日開催。現状の課題を議論し、以下の意見を得た。

教室スペースの課題

- ・ SG コースの生徒しか利用していない。
- ・ 少人数（定員 24 名）の授業しかできない。
- ・ 複数授業の同時開講ができない。
- ・ 掲示物がごちゃごちゃしている。
- ・ 広報的な目的の掲示物が多く、生徒の学びの成果物の掲示が少ない。
- ・ もともと英語のアクティブラーニングのための教室と認知されていたゆえに英語の授業で利用することが多いが、全ての教科でアクティブラーニングを導入している現状において、他教科の利用が少ないのはもったいない。
- ・ テーブルやホワイトボードが固定されていて移動しにくいいため、実際にはアクティブラーニングの場所として使い勝手が良いとは言えない。
- ・ 窓が開けられず、エアコンも老朽化しているため、空気がよくない。
- ・ 授業時間外でも、生徒が主体的に集まってミーティングしたり、教員が生徒の課題研究や推薦入試の指導をしたりすることが多くなってきたが、こうしたニーズの変化に対応できていない。



職員スペースの課題

- ・ 利用する教員が少ない。
- ・ 個別の机で打合せなどがやりづらい。
- ・ 教員や生徒にとって入りづらい空間になっている。
- ・ 長年整理していないため不要なものが多すぎる。

3.4.2. 第2回ミーティング（整頓作業）

8月24日開催。教室スペースの整理作業を皆で実施。特に、前回課題として浮上した掲示物の混沌を解消するため、一気に全ての掲示物を取り外した。これにより、まったく新たな空間が現出したかのように全体の印象が変わった。視覚的な効果の大きさを実感した。



3.4.3. 第3回ミーティング（理想像の案出）

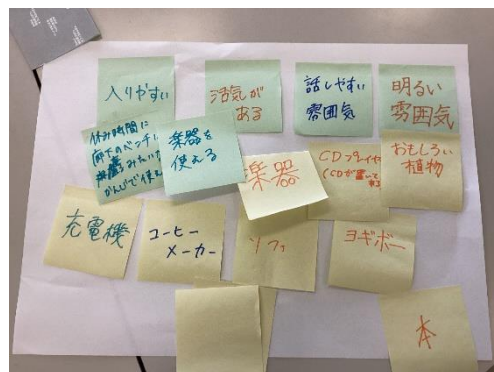
8月31日開催。理想の環境を議論し、以下の具体案を得た。

- ・職員スペースを現在の半分ぐらいにして、教室スペースを拡大する。
- ・職員スペース内の机をフリーアドレスとし、国際部所属にかかわらず、教員が打ち合わせをしやすいようにする。
- ・職員スペースと教室スペースの間の壁をガラス窓でできたパーテーションとし、教室側から職員スペースの中が見えるようにする。
- ・教室スペースにおいて、本のある環境を整え、探究心や知的な好奇心が自然と醸成される空間にする。
- ・必要のないものを片付け、学校内外でリサイクルする。

3.5. 生徒フォーカスグループミーティング

全校生徒から参加者を募り、21名が応募。Classiで情報共有グループを作成の上、複数回のミーティングを実施。9月11日開催。以下のニーズが得られた。

- ・ゆったりできる空間
→ソファ、ぬいぐるみ、ヨギボー
- ・明るい、暖色、話しやすい、活気がある、教員との壁がない
→照明、テーブル、カーテンなどの新調、全面にホワイトボード
- ・廊下のベンチみたいに気楽に使えるような空間、入りやすさ
→現状：入り口が暗い、秘密基地感、認知度が低い
→休み時間に使える映画やライブ練習視聴コーナーを作る、掲示板
- ・憩いの場
→無料のお菓子コーナー、ジュースサーバー



- ・植物やペット
 - 花、オリーブの木、ハムスター、猫、鳥、水槽
- ・自習室として利用したい
 - 充電器、コーヒーメーカー

上記の通り、自由闊達なブレインストーミングと議論によって、教員だけでは気づかない具体的な意見やアイデアが得られた。実現可能性を考慮した形に落とし込むため、生徒フォーカスグループの中からコアメンバーを今後の業者との打合せに同席させることとする。コアメンバーは、大学で空間デザインを専攻する予定の高校3年生1名、ニュージーランド留学経験のある高校2年生1名、空間デザインに関心の強い高校1年生2名の計4名とした。

3.6. グローバルセンターの理想のありかた

上述の通り、生徒および教員へのアンケート調査やフォーカスグループミーティングを通じて、多種多様な課題やニーズが明らかになった。これらを踏まえて、グローバルセンターの理想のありかたと大事にしたい価値観の要点を以下に整理する。

教室スペース

- ・面積を約1.5倍に拡張し、より広く、より大人数で、より多目的に使用する。
- ・SGコース以外の多様な生徒が利用できる。
- ・複数授業の同時開講ができる。
- ・移動できる机やホワイトボードを配置し、安全かつ柔軟にアクティブラーニングを実現する。
- ・木質化を進め、心理的に落ち着いて過ごせる空間に改良する。

職員スペース

- ・面積は半分程度にし、より多くの教員が利用できるフリースペースとする。
- ・教室スペースとの間の壁をガラスのあるパーティションとすることで職員スペースを可視化し、生徒が教員に相談しやすい環境にする。
- ・職員スペース内の個別デスクを最小化し、気楽に打合せや雑談ができる空間にする。

大事にしたい価値観

- ・参加型デザインによって、できるだけ生徒の意見を反映させる。
- ・教員にとって働きやすい空間を作る。
- ・現在あるものを可能な限りリサイクルする
- ・完全なものではなく、生徒とこれから作り続けられる空間を作る。
- ・お金を大事にする。
- ・リノベーションプロジェクト自体が学校の「探究」活動の実践であるという意識を持って、現場感覚を大切にしながら主体的に進める。

4. グローバルセンターのリノベーション

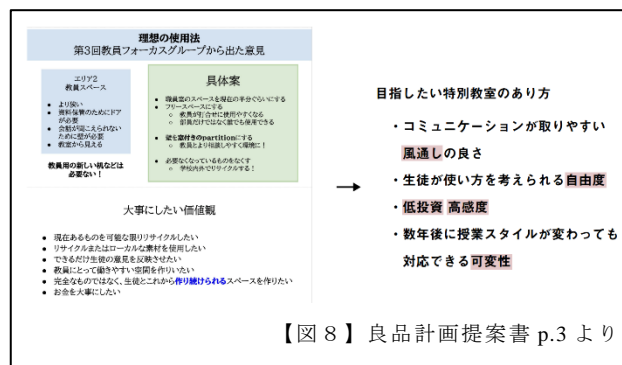
生徒教員の協力によってグローバルセンターの課題や理想のありかたが見えてきた段階で、3つの業者に打診して提案や見積りを依頼した。業者との打合せには可能な限りコアメンバーの生徒に同席してもらい、空間を利用する当事者の声を設計担当者に直接伝える機会を確保した。

4.1. 良品計画の提案

3社のうち、採用することになったのは株式会社良品計画である。初回の打ち合わせ（10月17日実施）において本校が考えるグローバルセンターの課題や理想像をまとめた資料を提示して説明した。それを踏まえた提案書を2回目の打ち合わせ（11月1日実施）にてご提示いただいた。そこには以下の特徴があった。

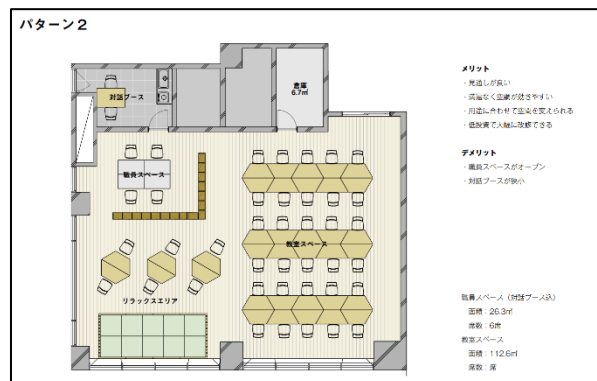
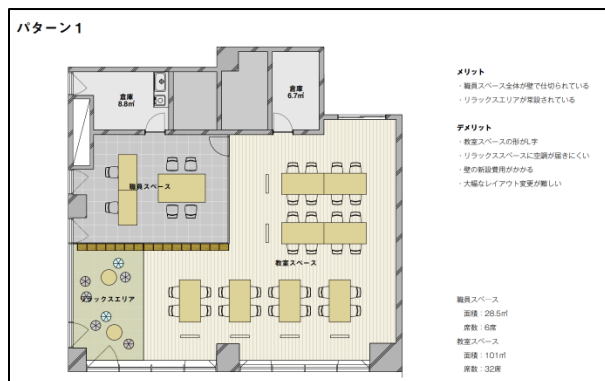
4.1.1. ニーズの確かな理解と概念化

本校が提示した資料をよく読み込んだうえで、それをそのままなぞるのではなく、「風通しの良さ」「自由度」「低投資・高感度」「可変性」など、プロの視点から概念化して整理してご提示頂いた。



4.1.2. 複数パターンの比較提案

初回打ち合わせにて議論したイメージをもとにした提案図面（パターン1）に加えて、低投資で大幅に改修が可能な図面（パターン2）をご提案いただいた。パターン1は本校の要望に基づき、教室スペースと職員スペースをガラス付きの壁で仕切って防音性を確保したものである。一方パターン2は、壁よりも安価なスタッキングシェルフで仕切ることで、用途に合わせて空間を変えられる可変性を確保するものであった。職員スペースの防音性が保てないというデメリットに対しては、倉庫スペースを対話ブースにするという解決策をご提示いただいた。結果的にはパターン1を採用することになるが、当方が思い浮かばないソリューションをご提案いただいたことが、プロフェッショナルな仕事に対する信頼感を高めたことは確かである。

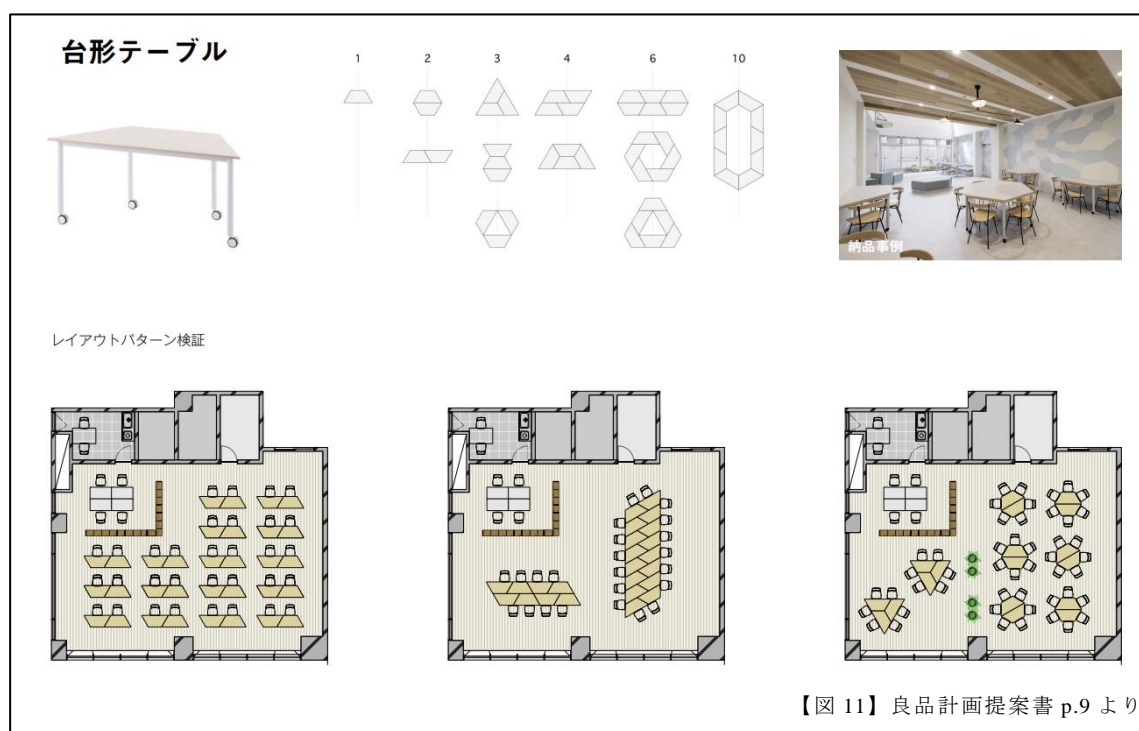


【図9】良品計画提案書 p.5 より

【図10】良品計画提案書 p.7 より

4.1.3. 最適な家具

提案の中で我々が最も惹かれたものが、台形テーブルである。一般教室にある JIS 規格の長方形の個人机でもなく、複数人が使用する大きなテーブルでもない、新たなサイズ感のテーブルであり、図 11 のように複数のテーブルを組み合わせることで様々な形に変化し、様々な人数や用途で用いられる可変性のきわめて高いテーブルである。この台形テーブルこそが、新グローバルセンターの教室スペースの核となるアイテムとなることを直感した。実際の使用感を検証するために、すぐにサンプルを 2 台購入することにした。その検証の様子は 4.3.2 項で詳述する。



4.1.4. 自然素材のマテリアル

教室スペースの床は、国産の天然木材のフローリングをご提案頂いた。表面はナラ、基材は国産針葉樹合板を使用したものである。一般的には欠点とされる木材の節ふしをはじくことなく 1 本の木を無駄なく活用したものであり、そのおかげもあって平米単価は 6,500 円に抑えられている。壁紙は、ビニールを一切含まない、亜麻など植物由来の繊維でできたものであり、廃棄時にはバクテリアに分解されて土に還る素材である。こうした、天然資源や未利用資源の活用など環境に配慮したマテリアルの採用は、本空間の教育的な価値を高めるものとして評価できる。

以上のように、付加価値の高い提案をして頂き、見積額も妥当であったことから、本プロジェクトを進めるパートナーとして良品計画を選定することとなった。

4.2. 良品計画本社の見学と打合せ

11月18日（月）、東京都文京区にある良品計画本社オフィスにて見学と打合せをした。教員3名に加え、プロジェクトのコアメンバーである高校3年生1名を帯同した。

2024年2月に新たに移転したばかりの本社の5階と1階を見学させて頂いた。メインフロアとなる5階にはフリーデスク制の執務スペースや大小のミーティングブースに加え、中央部に広いオープンスペースが設けられ、部署をまたいだ交流や休憩がしやすい空間となっている。1階には社員だけでなく取引先や地域の人が利用できる広いコミュニティスペースがある。



オフィスに関しては、「完成させないオフィス」というコンセプトが重視されている（良品計画、2024）。一見奇異に感じるコンセプトだが、これは2015年次のリノベーションから強調されている。その狙いを引用する。

「完成させないオフィス」。今回のオフィスリノベーションをする際のテーマである。リノベーションは一斉ではなく、フロアごとに時間差で行った。改善点はすぐに見直して次に反映させ、リノベーション後もより働きやすい環境をつくっていく。ゴールを定めず、完成させないことで、「自分たちで働く場を良くしていこうという風土づくり」を培おうというのである。（良品計画、2017、p.15）

この点は、本研究が志向する参加型デザインの考え方によく合致する。オフィス環境で実現されている理念を、学校という教育空間にもぜひ適用したいと感じさせられた。

空間のネーミングについても気づきを得ることができた。良品計画のオフィスの空間には、エリア別のネーミングがほとんどない。名付けにより空間の使用法が限定されるのを防ぐ効果があるのだろう。「グローバルセンター」や「教室スペース」というネーミングも、空間の使用法を限定するおそれがあるため、より柔軟でオープンな使用を可能にする名付けを今後検討していく必要があると考えている。

今回同行した高校3年生は、大学で空間デザインを専攻する予定ということもあり、最先端のオフィス環境を目の当たりにして大いに刺激を受けたようである。特に印象に残った点を尋ねたところ、「すべてが人を中心に行っているように感じられた」と述べた。これは本質を突いた気づきと言えよう。固定的で閉じられた空間デザインによって人の動きが支配されるのではなく、可変的でオープンな空間デザインによって、個人個人が働きやすく対話しやすい環境になっているのである。本校のグローバルセンターもこうした点を空間デザインに反映させたいという思いを生徒と共有することができ、大変有意義な訪問となった。

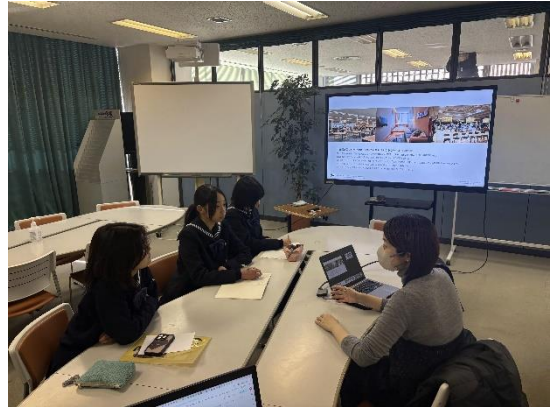
4.3. 良品計画によるワークショップ

2025年1月8日、良品計画の営業担当とデザイナーをお招きして、ワークショップと打ち合わせを行った。フォーカスグループコアメンバーの高校2年生1名と1年生2名、教員3名が参加した。ワークショップでは、以下の3つを実施した。

4.3.1. 良品計画の空間設計事業の紹介

空間設計事業のご紹介を頂いたなかで、印象的な点を以下に挙げる。

- ・「空間が美しいだけでは、地域も社会も良くならない」という価値観を大切にしている。急に新しくてきれいな空間を一方向的に与えられても、利用者は受け止めきれない。それを作るまでの過程、そこに住まう人と一緒に話し合うところから入って、設計に落とし込む。それによってイメージができ、自分が自らこういう生活をしようと思える。



- ・空間デザインに加えて、「伴走支援」をしている。その中には、利用者自らが働く場をよくしていこうという風土作りから共に行う「意識醸造プログラム」や、利用者も気軽に参加できるDIYの「場づくりワークショップ」などがある。

生徒との質疑応答

- ・無印良品の名前の由来は何か？

→製品や空間を設計するデザイナーの名前を出していない。名前を出して高価なブランドの物を購入する購買意欲ではなく、ものの良さで勝負する。それゆえ無印良品。

- ・なぜ良品計画では木を多く使うのか？

→天然素材を活用したいという思いが強い。化学的な製品は無機質。ぬくもり、てぎわりの変化、においなど五感に訴える点が天然素材の強み。国産材活用していることにもこだわりがある。国土の七割は森林。海外産のほうが安価なため、せっかくの国産材が活用しきれしていない。未活用資源として国産木材の活用こだわっている。

生徒の感想

- ・どこの無印良品のお店に行っても、ただ見た目が良いだけでなく、一緒にいる人との時間を楽しめ、居心地が良い雰囲気を感じる。良品計画が設計する空間にはプラスアルファを感じる。

- ・無印良品は素材にこだわっている商品が多いという印象だったが、それだけでなく、その人に合った目に見えないところでの空間をデザインしているということが新しい発見だった。

- ・空間設計という、裏からサポートして、そこから人につなげる役割を果たすという任務を担っていることがわかり、仕事としてとても楽しそうだと感じた。

4.3.2. 台形テーブルの検証

グローバルセンターの空間設計コンセプト等をデザイナーより改めて丁寧に説明頂いたうえで、サンプルとして2台購入した台形テーブルの使い勝手を実際に検証した。

生徒と教員の感想

- ・大きすぎず小さすぎず、高すぎず低すぎず、サイズ感はちょうど良い。
- ・個人作業、ペアワーク、グループワークなど、多種多様に利用できて良い。
- ・互いに話す時の顔と顔の距離感や角度が自然でちょうど良い。
- ・キャスターがついていて、移動させる時に重さを感じない。
- ・木目の色合いがやわらかく、落ち着く。



- ・当初、教室スペースに32台の台形テーブルを置く予定であったが、空間の占有率が高くなりすぎてしまうのではないかと懸念された。

ワークショップでの議論と検証によって、台形テーブルが新グローバルセンターに最適の家具であることを、生徒、教員、設計者の三者で一緒に確認することができた。採用台数は当初案より6台減らして26台とし、そのうち2台は職員スペースの打合せ用テーブルとすることにした。



5. 考察と今後の展望

5.1. 考察

グローバルセンターのリノベーションプロジェクトにより得られた知見は、下記の点において多くの学校において有用だと考える

1) 参加型デザインの有効性

教室という空間を実際に利用する生徒や教員の声をその空間デザインに反映させることは、子どもの意見表明権やウェルビーイングの尊重、働くひとの心理的安全性の保障という観点からも、今後ますます普及していくべき実践である。自分たちが使う教室のデザインに自分たちが関わっているという意識は、あらゆる学びの「自分事化」につな

がるという点でも、教育的価値が高い。むしろ、全ての生徒の全ての声を反映させることは現実的に難しい。アンケート調査や初期のフォーカスグループは可能な限り多くの生徒を参加対象としながら、デザインへの落とし込みにあたっては、意欲の高い生徒を適切に選抜して参加させていくという絞り込みも重要だ。本プロジェクトでは、自分自身の将来のキャリアとして空間デザインに関心のある生徒をコアメンバーとして業者との打合せや見学に同行同席してもらったが、このやり方は現実的に上手く機能したと評価している。

2) 課題と理想像の明確化

2.1 1)で長澤悟先生の言葉を紹介したとおり、「学校のリノベーションにあたっては、設計士に設計を委託する前に、学校としてどのような空間を望むか、言語化しておくことが大事」である。これを担当教員や事務員だけでやろうとせずに、適切なプロセスとチームワークでやるのが成功のかぎとなる。本プロジェクトでは、そのプロセスとして、生徒・教員それぞれのアンケート調査やフォーカスグループの数次の議論というプロセスが有効であることを示すことができた。また、信頼のおける設計施工業者の選定にあたっては、こうして言語化された課題や理想のありかたを、対話や問答を通じて適切に理解し、概念化して、付加価値のある空間デザインに形象化できているかを重視すべきである。

5.2. 今後の展望

本研究を通じて定まった空間デザイン図面をもとに、2025年3月にグローバルセンターの改修工事を行う。重要なことはこの改修工事でプロジェクトが完了するわけではないということだ。新しい空間が、これまでの課題の全ての解決につながるわけではない。改善された点とさらに改善すべき点について、引き続き検証を重ねていく。その際には、本プロジェクトで培った「参加型デザイン」の手法を継承する。4月以降、新たに入学する新入生にも参加の機会を確保した上で、空間のデザインを続けていく。1.3で示したとおり、参加型デザインにおいては「作りながら考える」という意識が重要である。学習において学び続ける意識が重要なものと同じであろう。生徒と教員とデザイナーがフラットな立場で対話と言語化を重ねられる機会を継続的に設けていく予定である。

いずれの学校においても学内の様々な空間において、新たな価値の創出の可能性が秘められているはずである。本校においても、グローバルセンター以外の空間のリノベーションにあたって、今回の参加型デザインの方法論を踏襲していきたいと考えているが、ぜひ多くの学校で参考にして頂ければと願う。

最後に、参加型デザインの有効性は教室空間のデザインにとどまるものではない。例えば修学旅行や国内外の研修等は、教員と旅行業者で行程を全て決めることが従来より一般的だろう。しかし、旅の目的や行程などを生徒とともに議論して、生徒が参加する形で業者

と一緒にデザインすることで、旅の教育的価値は格段に向上するだろう。これまで大人がやるものと固定的に捉えていた業務を抜本的に見直す発想源の一つとして、参加型デザインは大いに有効だと考える。

参考文献

学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議（2022）「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について 最終報告」

https://www.mext.go.jp/content/20220328-mxt_sisetuki-000021509_2.pdf

株式会社良品計画（2017）『無印良品の業務標準化委員会』誠文堂新光社

株式会社良品計画（2024）「ニュースリリース 良品計画新オフィスでの営業開始とオフィス事業拡大のお知らせ」

https://www.ryohin-keikaku.jp/news/pdf/20240131_New_office.pdf

慶應義塾大学環境情報学部 水野大二郎研究会（2019）「Participatory Design Genealogical Study 参加型デザインの系譜」

https://issuu.com/tacticaldesign/docs/revised_final_participatory_design

塩瀬隆之（2014）「ユーザーのためではなく、共に実現するものづくり」ジュリアカセム・平井康之・塩瀬隆之・森下静香『インクルーシブデザイン』学芸出版社（pp.57-78）

中央教育審議会（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」

https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf

野中陽一（2023）「『個別最適な学び』と日本の教室環境」野中陽一・豊田充崇『個別最適をつくる教室環境』明治図書（pp.8-28）

平井康之（2014）「インクルーシブデザインとは何か」ジュリアカセム・平井康之・塩瀬隆之・森下静香『インクルーシブデザイン』学芸出版社（pp.39-56）

山内裕（2012）「参加型デザインとその新しい展開」『システム／制御／情報 56 巻,2 号』（pp.57-64）

共同研究者

（代表） 秋田 聡大

ジェスパークン セーラ